学べるゲラ

第69回
8位から再出発　三浦佳生選手

※2024年5月の毎日新聞記事を元にした文章です。
校閲し、直すべきところを指摘してください。

「初舞台」は、ほろ苦いものだった。

フィギュアスケート男子の三浦佳生（かお）選手は、初出場した世界選手権（2024年3月、カナダ・モントリオール）で8位にとどまった。ショートプログラム（SP）、フリーでミスが出て、本来の力を発揮することができなった。しかし、「今はもう、前を向いている」。悔しさを胸に、拠点・神奈川から再び歩み始めた。

4月14日、横浜市で開催された「リリーカップカナガワ」にその姿はあった。フリーのみで争われる大会で、157・7点で優勝。シーズンを共にしてきた曲「進撃の巨人」の滑り納めとなった。

「今回は結果を狙っていたわけではなかったので、特に（ミスして）落ち込む感情とか、そういうのはなかったです。ただ、（冒頭の）ループを締めたかったですね」

演技前の6分間練習できれいに降りていた4回転ループは、本番では回転が抜けて3回転に。それでもここまで苦戦し続けていたジャンプを練習でクリーンな着氷は自信になったようで「ループはもう基本的には（最初から構成に入れる）スタメンでいきたい」と早速、構想の一旦を明かした。

三浦選手は23～24年シーズン、グランプリ（GP）シリーズ第5戦のフィンランド大会でGP初優勝。2季連続のGPファイナル進出を果たし、全日本選手権も過去最高タイの4位と、安定した成績

で世界選手権代表の座を射止めた。

「シーズンの中で一番状態が良い」と自信を持ってのカナダ入り。だが、世界一を争う独特の雰囲気の中、三浦選手の滑りは思うにいかなかった。

SPは、4回転サルコウ、3回転半ジャンプを成功させたものの、4回転トループで転倒。予定していた3回転ループとの連続ジャンプにできず、85・00点で10位と伸び悩んだ。

中1日で迎えたフリーは、演技前半にルッツとサルコウで転倒してしまう。後半に意地の4回転―3回転トループを決め、フリー7位の169・72点として順位を押し上げたが、本人は納得していなかった。

「また自分の無力さを感じる(フリーの)4分間でした。せっかく(代表の)枠をいただいたのに、こういった内容で、申し訳ない気持ちでいっぱい。自分もがっかりしています。語る表情は暗く、目は少し潤んでいた。

この大会では、同世代のイリア・マニリン選手(米国)が4回転半ジャンプと5本の4回転ジャンプを着氷したフリーで歴代最高得点を更新し、優勝した。幼い頃から三浦選手としのぎを削ってきた鍵山優真選手も、合計で300点の大台を超える滑りで3度目の銀メダルを獲得。「僕はまだ(ライバルに)なれていない。もっと強くなる必要がある」。追いかける背中は、遠く映った。

この経験があったからこそ、オフシーズンの課題は明確になった。技のつなぎなど、ジャンプ以外の要素以外の精度を高めていくという。

「PCS(演技構成点)を底上げしていきたい。『進撃の巨人』が競技向きではないなと感じたので、その点で(より競技向きの)『フィギュアスケート』をすることを目標にしていきたいです」

もちろん大きな得点減となるジャンプを怠るわけではない。練習

では高難度の4回転フリップにも挑戦した。武器にできれば4種類の4回転を「手札」として持つことができるため、滑りの幅は広がる。「オフにいろいろやってみて（自分が）変われれば、そういう（高難度の）構成でやってみたい」と意欲を示す。

カナダの首都で突きつけられた現実も、きっと力へと変わる。新たなステージで、己の滑りを更に磨いていく。